

土曜 ライフ・楽しむ

10年前の震災 忘れてはならない

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



2011年2月22日、ニューヨークでカンタベリー地震が起きました。かつて留学したおいが世話になり、とても良いところだと聞いたことがあったので、大変驚き、被災された方々に思いを寄せ、心が痛みました。

そのほぼ半月後の3月11日、あの東日本大震災が発生しました。北海道でも大きく揺れ、書棚を支え、ストーブを消すなど大わらわでした。テレビから流れる、過去に経験したことのない災害の様子は想像を絶するもので、特に津波の怖さを痛感しました。地震と津波という自然災害に加え、人災と呼ぶべき原発事故が重なったことが一層、傷を大きくしました。

れ菌、老眼鏡、杖、コンタクトレンズ洗浄液、補聴器の電池、電動車いす用バッテリー、アレルギー対応食なども不足したらしく、それらに対する動きもありました。

あの地震の瞬間を、覚えていますか。あれから10年。「まだ10年」か、「もう10年」か。それぞれの立場で受け止めは異なるかもしれませんが、今なお不自由な暮らしを強いられている方がたくさんいらっしやるのは現実です。被災された痛みや苦しさを、悔しさ、悲しさが分かるとは言えません。しかし、あ

の震災の事を決して、忘れてはならないでしょう。わが国は地震大国、16年4月の熊本地震をはじめ数多くの地震が続き、ブラックアウトを経験した18年9月の北海道胆振東部地震の記憶も鮮明です。より大きな地震がいつ起きても不思議ではないとも言われています。台風や長雨、豪雪などに見舞われることもあります。

「のと元過ぎれば熱さ忘れる」という言葉があります。が、いざというときに慌てない備えが不可欠です。そのために、「日ごろから防災の意識を忘れず行動する」「電気や水を無駄にしない」など、今できることを続けようと改めて肝に銘じています。

これもかつてない事態のコロナ禍の今こそ、もう一度じっくりと10年前のことを振り返ってみませんか。



震災発生直後に消防や警察、自衛隊のほか、ライフライン関係機関や医療、介護など様々な分野でいち早く支援の活動が動きだしたのは頼もしく感じました。私の身近にも、検視を担う医師、混乱の中で現場を支援する看護師、消防士などで、すぐに現地へ赴いた方々がいいます。遺体を搬送するため霊柩車やおくりびとも現地に派遣されたそうです。業界団体が、北海道南西沖地震や阪神・淡路大震災などの経験から態勢を整えていたのだでしょう。さすが、と思ったものです。

目立たないところでは、入